



歳時記のある暮らし

二〇二二年

《十一月》

冷たい風が吹き冬の気配を感じるころとなりました。

皆様、おすこやかに「過ごしてしょうか。」

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。

十一月の和風月名は「霜月」。霜が降りるころという、いかにも寒そうな呼び名です。十月はハロウィンや行楽、十二月はクリスマスや除夜の鐘などワクワクするイベントが思いづくのに、十一月はハッと思いつきません。けれども今年の十一月の暦を見ると、行事が多いことに気づきます。三日は文化の日。小春日和には赤や黄色に染まった街路樹を楽しみながら美術館を巡ったり、小枝や木の実を集めてクリスマスリースの準備を始めるのも素敵なお過ごし方ですね。六日は「亥の子の日」。「こたつ開き」をする習わしがあります。「亥は陰陽五行説で火を制する水にあたるため、「亥の月亥の旦から火を使い始めると火事にならないとされ、暖房器具を準備する目安となりました。実際には、もう少し寒くなってから使用するエアコンやこたつ、ヒーターなどもこの日に作動点検をしておけば縁起もよく、急な寒さに備えることができて安心ですね。七日からは本格的な寒さを迎える立冬。このころには「鍋の日」や「カニの解禁日」もあって、肌寒さを感じる身体に晩秋の味覚のありがたみが増すころです。

色付くや豆腐に落ちて薄紅葉

松尾 芭蕉

芭蕉はこれを紅葉狩りの宴席で詠んだのでしょうか。炭火にかけた鍋の中には、唐辛子でほんのり色づいた紅葉豆腐がゆらゆらと茹かっています。その様子を、紅葉が白い豆腐に舞い降りて色を移しているのではないかとうたっているようです。晩秋の楽しみが凝縮された句です。十五日は七五三。医療が発達していなかった昔は子供の死亡率が高く、徳川綱吉の子、徳松も身体が弱かったようです。しかし満月である十五日に各地で行なわれている収穫祭の日に健康祈願をしたところ、五歳まで無事に育ったそうです。そこから十五日が七五三の日として、収穫と子供の成長の両方を感じ、神様の加護を願うようになりました。十七日はボジョレー・ヌーヴォーの解禁日。ワイン好きにとっては一大イベントです。おいしい

(裏へ続きます)

ワインを作るブドウは、その年の日照条件、降雨量、湿度のほか、風や霜などの影響を受けて育ち、収穫されます。ブドウの病気はカビやバクテリアによるものが多いのですが、貴腐菌と呼ばれる、ある種のブドウを甘美な味にさせる微生物もあり、いろいろな要因が重なってブドウが完熟し、その年のワインの味が決まるので、まさに神の業ともいえます。

西洋では、バカスという酒の神様がブドウの栽培やワインの製造方法を考え出し、それを各国に広めたといわれます。バカスの姿は今でもフランスのシャトーが手がけるワインのラベルに描かれていることがあります。バカスにまつわる神話には、お酒につきものの狂気を表現するものもあり、人とお酒の関わりの本質を垣間見ることができそうです。

バカスに比べ、日本の酒の神様は「神人和楽」や「延命長寿」などの御利益をもたらしてくれる清らかな存在です。奈良の大神神社、京都の梅宮大社と松尾大社の三つは「日本三大酒神神社」で有名です。「古事記」には、スサノヲノミコトがヤマタノオロチを退治するための酒が登場しますが、神様と人がコミュニケーションをとる神事では酒がつきものです。酒は、その場に集まった人々が神に献上した酒を一緒に飲むことで神々に近づく大切な神事でした。

二十三日の勤労感謝の日は、もともとは新嘗祭というその年に収穫された新米や新酒を神様に捧げる行事で、今でも宮中や各地の神社で行なわれています。十一月には「神楽月」という別名もあり、十月の神無月に出雲大社に出かけた神様が、もとの国に帰って来て神楽を奏で収穫を祝うことからこう呼ばれます。稔りへの感謝の神事を行なう十一月は、暮らしの傍らに神様の存在を感じる時期でもあります。

日暮れが早くなり木枯らし一号が吹きます。標高の高い山から次第に初霜、初雪、初冠雪の便りが届きます。来年のカレンダーや年賀状が発売されて気忙しく時間が進みますが、師走の忙しさが押し寄せ、寒さ対策を万全に晩秋を満喫しましょう。

皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係お手紙担当 久郷直子

